

10万の大津波を想定



発行所
北海道新聞社
郵便番号 060-8711
札幌市中央区大通西3-6
電話 011(221)2111
© 北海道新聞社 2010

訓練 号外

インターネットで道新ニュース
www.hokkaido-np.co.jp
ご購読申し込みは
0120-464-104

ぶんぶん号



多目的取材・宣伝車「道新ぶんぶん号」は2004年8月に誕生。マイクロバスに発電機、プリンター、パソコン、デジタルカメラを積み、機動性を生かして編集号外やイベント新聞、被災地における生活情報の発行などを進めています。出勤回数はいままでに1700回を数えます。2004年10月の新潟県中越大地震では地元新潟日報の要請を受け、避難所ごとの「こころだけ新聞」を発行しました。

釧路で大規模総合訓練

65機関、1万人参加

2004年のスマトラ島沖地震を機に全国で年1回実施する大規模津波防災総合訓練(国土交通省主催)が16日、道内では初めて釧路市の釧路西港を主会場に行われた。10日を超える大津波を想定し65機関、延べ1万人が避難や救出・救護、ライフライン復旧などの訓練を連携して実施した。

参加団体は、釧路開建や北海道、釧路市、海上保安庁、道警、陸海空各自衛隊など公的機関にJR、北電、NTT、医師会など民間団体を加え、計65機関となった。開会式では主催者を代表し、三井辨雄国土交通副大臣が「釧路管内は過去に、いく度となく津波に襲われてきた。この訓練を期に一層の対策強化に努めてほしい」とあいさつ。



大型ビジョンに映し出される大津波のコンピューターグラフィックス(CG)を見る参加者



壊れた住宅に取り残された被災者を探る自衛隊の救助部隊

大規模津波防災総合訓練には、北海道新聞社の取材・宣伝車「道新ぶんぶん号」も参加した。会場で訓練の状況を伝える号外千部を制作し、釧路大付属中学の生徒の協力で配布した。

おこたわり
一部の写真はリハール
の場面を使いまし
た。

総合訓練は05年の和歌山を皮切りに徳島、宮崎、静岡と続き今回が6回目。
1960年のチリ沖地

震災で死者・行方不明11人、150戸以上の家屋が流された浜中町(当時浜中村)や厚岸町もサテライト会場として参

加した。
参加団体は、釧路開建や北海道、釧路市、海上保安庁、道警、陸海空各自衛隊など公的機関にJR、北電、NTT、医師会など民間団体を加え、計65機関となった。

津波警報や避難勧告、被災状況などが刻々と伝わり、海保のヘリが上空から避難誘導すると緊張感が高まった。

65機関、延べ1万人が参加した訓練の開会式



1次避難所から2次避難所に移ってきた被災者

官民連携多彩な訓練



各機関が役割を分担する現地対策本部



放置車両を撤去するJAFの隊員



バケツリレーで初期消火につとめる地元市民

子どもの笑顔で元氣パワー

避難所新聞の第1号は長岡・阪之上小学校で発行した。A3判両面カラー1500部。心身共に疲れ切った人々には「ます明るい話題」と考え子どもたちの笑顔の写真を掲載した。

裏面には、神戸新聞の協力を得て阪神大震災復興の経験談を記載した。1993年の北海道南西沖地震で被災した奥尻島や神戸の子供たちの激励メッセージ、ピンポイント天気予報も盛り込んだ。実質5日間で8回、計3900部の避難所新聞を発行した。



開会式であいさつする三井国交副大臣(左)と蝦名釧路市長

中越地震にも出動

道新ふんぶん号は、災害現場での活動も想定して製作された。全国の地方紙に先駆けた試みで、その後、新潟から沖縄まで11台の「姉妹車」が活躍している。

誕生から間もなく、被災地での活動機会が訪れた。04年10月に新潟県中越地震が起き、新潟日報の要請を受け現地入りした。最大震度7を記録した川口町や小千谷、長岡両市などをめぐり、避難所新聞Ⅱ左写真Ⅱを発行した。

小千谷市街は道路が寸断され、全体で8万人を超す住民が避難所暮らしを強いられていた。住民は、屋は家の片づけ、余震に怯える夜は避難所に戻る生活を続けていた。ストレスはピークに達していた。

避難所新聞の第1号は長岡・阪之上小学校で発行した。A3判両面カラー1500部。心身共に疲れ切った人々には「ます明るい話題」と考え子どもたちの笑顔の写真を掲載した。

裏面には、神戸新聞の協力を得て阪神大震災復興の経験談を記載した。1993年の北海道南西沖地震で被災した奥尻島や神戸の子供たちの激励メッセージ、ピンポイント天気予報も盛り込んだ。実質5日間で8回、計3900部の避難所新聞を発行した。